立は益々激烈化し、小銃を持つて廣川氏宅を襲う暴力に出る者さえあるに至つた。村民は二派に分れて抗爭し、學校に通う兒童さへ反對派の兒童と虐めあうという狀態まで至つた。

こうした情勢で明治三十四年に入つたら、縣で乘出し「葛塚村の滯納は決して太田古屋村民に負擔せしめず、舊葛塚村で負擔する」との條件の下に漸やく合併が成立したのである。

合併前の太田古屋村の村議は、古老の記憶によると、水戸仁平藏、田中藤一郎、兒田島傳藏、飛鳥井是吉、石崎謹藏、小林傳藏、川崎達太郎、金子太之藏等であつたという。

尤も其頃であるから、盛に議論はしていても議案の讀めない議員があつたり、滑稽なのは、重大決議の會議に「賛成者は起立」といわれて、起立の語義が分らないため、どうすればよいか分らず、中腰になつてうろ〳〵人を見ていたなどという笑話さえ傳わつている。

嘉山村は當時市島次太郎氏が村長をつとめ、市島力造氏が村會の議長となつて村政を擔當していた。兩人とも自由黨系ではあつたが、阿部康介氏等と提携して合併に努力した。村民も政黨色にこだわらず當局に同調した。

隨つて太田古屋村ほどの激烈な反對はなかつた。村の解散に際して議員に銀盃を贈つて記念としたという樣に圓滿に解散した。

然し新鼻だけは猛烈に反對した。これは水利關係のためである。新鼻部落は水利的に見て葛塚より長浦村に合併した方が有利であると主張した。これがために市島村長と

北蒲原郡取扱所
北蒲原郡葛塚町中町
三村豐

市島力造氏が特に難儀されたわけであるが、どうしても部落の人達は結束して反對していた。

いよ〳〵となつて、佐々木豐松氏の宅で、三日に亘つて協議したがまとまらない。そこで市島力造氏は全力を盡して區長の丸山五平次氏を説得した。水利の事は葛塚村と切り離して特別有利にするという條件の下に、夜更けになつて漸やく合併の調印をさせた。

翌日、市島氏が新鼻に來て「もう調印が濟んだ」と聞かされ、村民も始めて合併に賛成した。一晩のうちに合併が成立したわけである。

いよ〳〵合併に決定したので、三役場は解散し、新に現在の地に葛塚町役場が建てられた。縣官が出張して、財産の合併も行われた。今七十歳以上の方々の中には、當時學童であつて、三役場の諸道具を、縣官監督の下に運ぶ手傳をしたのを覺えておられる方々がある。

兎に角、寄り合い世帶の樣に机を始め諸道具不揃いのままであつたが葛塚町役場の新世帶で事務がとられた。

市島次太郎氏が町長事務取扱を命ぜられ阿部氏、常木氏市島力造氏等を背景に葛塚町制の新發足が出來得たわけである。

いよ〳〵明治二十五年一月二十日、龍雲寺を投票場として第一回町會議員の選擧が行われた。競爭激烈を極め葛塚町史上稀に見る殺氣立つた選擧だつたという。

選擧當日、改進黨系の人達は嘉山照善寺に本部を置き、自派の有權者が勢揃いして投票に出かける。自由黨系の人達は大口小川氏の宅で勢揃して出掛けて投票したという。雲寺の森に浦道から來たら、龍力團が待伏していることを聞かされて、表通りを廻り道して投票に行つたなど物情騷然だつた事が想われる。

其頃の選擧は連記投票で國稅の納入額に依つて一級、二級の兩議員に分れており定員は十八名だつたという。選擧の結果一級議員は自由黨が一名多く、二級議員は改進黨が一名多く獲得、伯仲した勢力で町會が成立した。

當初の議員として主な人々は、小川與次平、市島次太郎、山田藤太、阿部康介、木村元四郎、常木市二郎、齋藤七郎治等であつたという。

勢力が互角であり、政爭が烈しいため常に會議が暗礁に乘り上げるので元老制度を設け兩派から數名の委員を上げ、これを元老として協議を決定したという。葛塚町最初の議會風景を想像し得る。

附記　記念特集號に間に合わせたく急遽古老のお話しを集めて編集したものである。誤りも多い。他日を記して訂正したい。

特に本編の記載に當りお話し下さつた、青木勝三郎、常木信房、高田顯勇、小川寛次、水戸平作、佐々木賢次の諸氏にお禮申上げます

葛塚町
料理業組合
五十音順
大倉屋
電話　十七番
北幸
電話　三十番
中常樓
電話　十番
町北幸
電話　十一番
町中常
電話　二十四番

古老の座談會

……五十年前を語る……

時　十月二十二日
所　葛塚小學校禮法室
語る人　金子吉五郎　五十嵐幸次郎　前原リイ　青木勝三郎　内山直七　渡邊聞敎　高田顯勇　山田トエ　佐々木賢治　加藤孫次郎　常木信房（紙上參加）
公民館長　石井耕一
司會　渡邊冠　伊藤博次

古老の座談會

公民館長　あなた方は長い間、町のためにお働き下されて貴重な体驗をお持ちでございます。今は後進に道をゆずつて功成り名遂げ平和に幸福にお暮しになり、お仕合せのことお慶び申上げます。

町制布かれて五十年、花火まで上げて種々の行事を計畫しておりますが、たゞ記念のため、賑かにさわぎまわるのが目的ではありません。これについて私は大体三つの意義を考えております。

第一にはこの町制五十年を一轉機としてこれまで葛塚町の歩いてきたあとをふり返つてみたい。今こゝへくるに何氣なく歩いてきた道も、この學校も、たゞ雜作なくできたものではない。すべてが先輩の苦心努力によつてこのように住みよい町になつたのです。私たちは先輩の勞苦をしのび、今こうして安らかに暮されることを心から感謝しなければなりません。

第二には現在の町の狀態はどうなつているかをしつかり把握しなければなりません。人口、戶數、産業それらの現狀はどうなつているか、これをしつかり檢討して見る必要があります。

第三には、この現狀より見て町がどう伸びてゆくべきか、どの樣に努力してゆくべきかを考えて將來の方針を立てねばなりません。

この三方面から考えて、その根本となる五十年の昔を振り返つてみたいと思います。

あなた方は、ほんとうに町を憂え、町を築き上げることに努力下された、この過去に於てのうれしかつた事、苦しかつた事等の思出を自由にお話願つて一萬の町民に知つて置いて頂きたいと思つて、本日お集り願つた次第でございます。

町制施行當時の事情

司會　町制施行を斷行するについては、いろ〳〵の經緯、反對等があつたと思いますが、當時の輿論はどんなだつたでしょう。

渡邊　最初は市島次太郎さんが町長事務取扱として就任されました。葛塚村と合併することについて太田古屋村では、隨分反對がありました。葛塚村の方では滯納が多い。それを負擔させられたら大變だからご免だと騒いだのです。結局滯納の負擔は太田古屋村に迷惑かけないということで妥協ができました。

佐々木　嘉山村では水利關係で新鼻が、葛塚村につくより長浦村についた方が至當だというので大分もめました。それについて市島力藏さんが區長の丸山五平次さんに働きかけて難儀され、漸くまとまつたのです。

青木　葛塚衆は町になるんだからというので大した反對もなかつたようです。

司會　合併ができ何か賑やかな行事等があつたでしょうか。

青木　別にこれという權もなかつたようでしたね。

佐々木　嘉山村では合併の記念として銀盃を一箇づゝ議員に贈つていますね。私の家に現在殘つております。

渡邊　私は當時嘉山村役場に勤めておりましたが、合併に當つて吏員に金一封（二十圓）づつ貰いました。

司會　三條屋と山二三條屋さんは其頃は？

渡邊　もう弱つておりました。

内山　それでもまだ建物などはそつくりしていました。何しろ世盛りの頃は番頭が十二三人もいたし、土藏の五棟もあつて、三階造りの豪勢な店でしたからね。

加藤　三條屋弦卷七十郎さんは篤實な方で美談が傳わつていますが、風呂へ入るにも下男でも下女でも上下の別なく、自分より先に入らせたということです。その頃はもう衰えていました。

司會　山二さんが五十年前は全盛の時代だつたんですが大きい事業は何でしょう。

加藤　山二樣は酒造が本業でしたが質屋を大きくやられ、そのほか鼻緒やらいろんな營業をやつておられました。山二樣の「金龍」といえば遠く北海道邊まで聞えたものだ